

1.はじめに

日本時間で2016年8月26日から同年9月23日まで、留学生としてカナダのアルバータ大学に留学した。この4週間で学んだことについて、カナダの文化と、アルバータ大学の授業と、アルバータ大学が企画したアクティビティに分けて報告する。なお、今回のプログラムにおいて、留学生は全員ELS(English Language School)に所属し、そこで朝8時から正午まで授業を受けることになっていた。また、午後は同じくアルバータ大学が企画したアクティビティに参加する日もあり、内容は日によって異なった。

2.アルバータ大学短期留学で学んだこと

(1)カナダの文化

a)家庭ごとの団結

ホームステイ先において、日本よりも強い家庭の団結がみられた。例えば、毎週末は知り合いのパーティーや礼拝に必ず家族全員で行き、毎食はできる限り家族全員で同時に食べ、寝る前にはお互いを抱き合っていた。また、夕食では必ず、「今日の学校はどう感じたか」「今日1日で一番楽しかったことは何か」など、過ごした時間について家族で共有していた。行動として強く表れる愛情表現や悩みを共有しようとする文化は、日本では多くは見られず、家族への愛情表現・向き合い方の違いを感じた。

b)目を見て話すこと

カナダ人には、目を見て話し聞くことは真剣に話し聞いていることである、という文化があることが分かった。親が子供を叱るとき、はじめに必ず「私の目を見て話さない」と言い、目を見るまで叱らない。また、夕食中に近くに座った人が話し始めたら、目を見つめながら聞く。日常においても、会話はほとんど互いを見つめ合いながら行われる。日本でも、目を見て話すことは大切であると言われるが、カナダではそれがより強く強調されているように感じた。

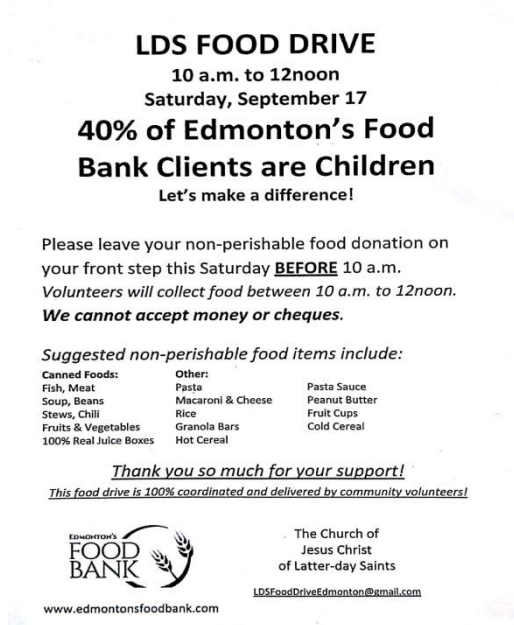
c)時間に対する価値観

留学中、どこにおいても、誰もが日本よりも時間に対してルーズであると感じた。交通の要であるバスは予定時刻から大幅に外れることは当たり前であるし、電車の到着を知らせるアナウンスもない。また、アルバータ大学の職員は待ち合わせ時刻までに来たことがなく、更にそれを自ら進んで謝罪することもなかった。その上、8月下旬に約束されていた学費の支払いは、正確な説明もなく9月上旬まで延期されていた。日本人は1分遅れただけで平謝りすることがあるが、カナダ人はその緊張感をほとんどもっていないように感じた。

d)ボランティア精神

ホームステイ先が参加していたイエスキリスト教会の企画に、LDS FOOD DRIVEという企画があった。十分な食料を確保することが経済的に難しい状況にある人々に、夕食の残り物や余っている食べ物を近隣の人々から集めて届けるというボランティア活動である。教徒の一部の家庭に、寄付を募るべき範囲が定められており、それぞれの家に寄付を募るお知らせの紙をドアに貼って

いかなければならなかった。ある日、私とホストファミリーで、定められた家 100 軒ほどにその紙を貼ってまわった。ホストファミリーの子供たちは面倒そうにせず、むしろ楽しそうに走って紙を貼ってまわり、大人たちはすれ違う人々に声をかけているところを近くで見て、日本ではなかなか見られない形のボランティア精神を感じた。



画像(1):実際に貼ってまわった紙

(2)アルバータ大学の授業

a)授業内容について

留学生は事前に受験したプレイスメントテストの点数とその散らばりによって、15のクラスに分けられた。各クラスには15人ほどの学生が在籍し、その半分以上は日本人であることが多かった。私のクラスはスピーキングの上達を中心として進めていったが、教員が質問を投げかけてもほとんどの学生が黙っていた。また、問いの答えを隠し持ったスマートフォンで調べる学生、考える間もなく答えを尋ね続ける学生もいた。積極的に授業に参加しようとしていたのは数人であり、その数人を中心に授業が進んでいたため、自らの英語の上達は自らの積極性にゆだねられていると言ってもよいだろう。また、教員もそのような考えているように見えた。

15のクラスの間には、宿題の量に大きな差が見られた。宿題は、クラスによってホストファミリーと話す時間がなくなるくらいのものであったり、あるいは数分で終わってしまう量であったりした。クラスが全体で統一されておらず、個々の教員に宿題の量が完全に任されているところは、日本の大学でもみられるが、留学生は基本的に一種類の授業しか受講していないため、アルバータ大学が授業について考え直すべきであると強く思った。

b)クラス内の交流について

ほとんどのクラスにおいて、4時間の授業のうち30分間が休憩として与えられていた。英語で多国籍の学生と積極的に交流していた学生もいたが、日本人同士で日本語で会話する学生も多かった。その場合、外国人は当然日本語を話せないため、外国人同士で会話することに

なっていた。やはり、授業外においても英語の上達は自らの意思にゆだねられると感じた。外国人と交流していた日本人学生は、Twitter や Instagram または Facebook などの SNS を利用することが多かった。

(3)プログラム内のアクティビティについて

今回酪農学園大学留学生に対してアルバータ大学が設けていたアクティビティは約 10 種類ほどあり、Canadian Rockies Trip と Faculty Social を除いては午後 1 時ごろから夕方ごろまでかけて行われた。ここではそのうちのいくつかを取り上げる。

a)Faculty Social

留学生を迎えるための大規模なディナーパーティーということであったが、実際に開催されたのは帰国する数日前であった。全員が公式的な服装をすることが望ましかったため、パーティーの前になるとスーツやワンピースを探し始める学生が多くみられた。留学プログラムの幹部や来賓の方がしばらく話して全員で夕食を食べたあと、ダンスが行われた。部屋の一角を薄暗くして、大音量の音楽に合わせて振り付けも全く分からない状態で意気揚々と踊りだすところは非常に新鮮な文化ではあったが、私はそれを受け入れることができなかった。



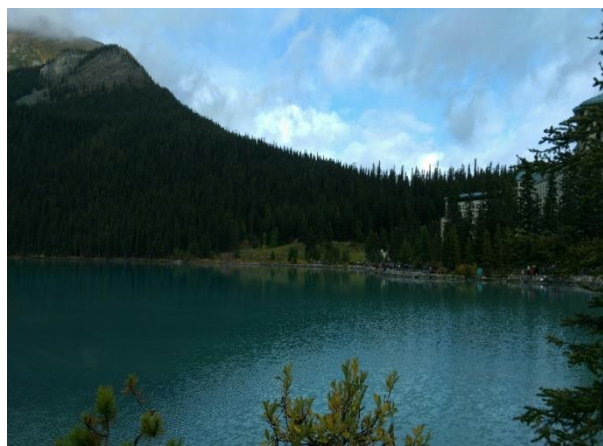
画像(2):ダンスの様子

b)Canadian Rockies Trip

二泊三日でロッキー山脈の近くをツアー旅行のように観光した。幸いにも、どの日も天候に恵まれ、豪雨になることも雪が降ることもなかった。山道を歩いたときは、自分がどこにいるのか分からなくなるくらい遠くまでの景色が見渡せた。また、訪ねた Lake Lewis の水はきれいな碧色をしており、その上をカヌーを漕いで移動した。どれも日本では決して体験できないものであり、気候や風景の違いも新鮮であったが、それらを通した目に見える国の様子の違いに衝撃を受けていた。



画像(3):ハイキングの様子



画像(4)Lake Lewis

c)Pig Science Centre Tour

このアクティビティは詳細な連絡を受ける前に、アルバータ大学側の都合で中止となった。その代わりに、プログラム最終日に Archibald Equine Veterinary Centre という馬の専門病院へ行くことになった。この病院で削蹄用具や骨格標本まで馬の治療に関わる様々なものについて説明を受けたあと、馬の小さな手術を見学することができた。その場にいた学生は全員酪農学園大学の獣医学類の学生だったこともあり、全員が真剣に見学していた。文化や気候や言語が大きく違っても、動物を治療する獣医の真剣な眼差しは同じなのだと痛感した。



画像(5):削蹄に用いる道具



画像(6):馬の手術を始める様子

3.まとめ

4週間という短い期間で、日本では考えられないような貴重な体験をたくさんすることができた。私は将来海外で働くことを視野に入れているので、語学能力上達のために今回のプログラムに参加した。しかし、酪農学園大学から一緒に参加した留学生たちや私のことを娘のように扱ってくれたホストファミリーや教員の方々のおかげで、最も心温まる4週間で過ごすことができた。また、私の TOEIC スコアはこのプログラムに参加した酪農学園大学の留学生の中ではかなり上位であったが、一人だけでこのプログラムをうまくこなしていくことは不可能だったであろう。つまり、今回の研修でカナダ人の温かさだけでなく、私たち日本人の温かさにも気づくことができた。次年度の研修を考えている学生には、このプログラムはきっと単なる語学研修では終わらないことも、ぜひ加えて考慮していただきたい。